

翻 訳

北宋の銭荒： 財政から物価に至るまでの考察

袁 一 堂 著
安 蘊 幹 夫 訳

筆者は曾て北宋の銭荒を把握しようと試みて、その結果銭荒は、北宋時代における特有の経済現象であると定義した。すなわち、高鑄幣量の条件の下で発生した銭荒は「今後継続して研究する必要がある大きなテーマ⁽¹⁾」であると理解した。銭荒は形式の上から見れば貨幣史の問題であるが、波及した範囲と内容は極めて広く、ほとんど宋代の生産、交換、分配、消費を内包した各々が主要な環節である。このことより、過去に未だ論及されていない財政と物価の問題を取り上げて銭荒を考察し、再び学术界に教えるを乞うものである。

一、北宋の銭荒を形成する原因について 幾つかの補充と訂正

(一)北宋に発生した銭荒の主要な原因を、宋代の自然経済の解体と商品経済の迅速な発展の結果に帰結することは、筆者の目からは、固よりある幾つかの単純化した傾向が存在したとは言え、実際にはこの錯覚を起こすことは、往々にして避けることが容易ではないように見える。その原因は、宋代の経済発展の水準が比較的の高いことであり、このことは確かに争論

(1) 拙作「北宋銭荒：從幣制到流通体制的考察」「歴史研究」1991年第4期。

のない歴史事実であって、殆どの宋史の専門家達の一致同意したものである。鄧広銘先生は「宋代は中国封建社会発展の最高段階であり、両宋期内の物質文明と精神文明の到達した高さは、中国における封建社会の歴史時期全体の内では空前絶後だと言える⁽²⁾」と説明している。漆侠先生は自分の巨著『宋代経済史』の中で、宋代は「農業労働生産率が過去のいかなる歴史時期を超越している。…特に私人の手工業は大いなる発展が見られ、遙かに如何なる前代のそれを越えた⁽³⁾」と言っている。日本においては、内藤湖南が創始して宮崎市定が継承した京都学派の観点は、宋以後を「近世⁽⁴⁾」とずっと堅持して見てきた。宮崎市定先生はなお一層彼の観点を発展させて、宋代の文化と自然科学の発展は「すでに世界の先端水準に達した」、これは「東洋の文芸復興の産物⁽⁵⁾」と分析理解した。しかも石炭と鉄の広泛な使用が、則ち「世界史上において東洋の先頭の地位を齎した⁽⁶⁾」とも考えられた。「近世」説が成立できるかどうか、暫く論を置くとして、上述の専門家の結論は、長期に存在した両宋が「積貧積弱」であったという伝統的な見方を改めており、このことは宋代の貨幣関係の研究をやっている学者にとっては、影響が無いことはないであろうということである。更には、未だ北宋の貨幣の増加については解答を出しておらず、しかも同時にまた詳しく考察していない状況下において、商品経済の迅速な発展が、このような結論を導出させることを極めて容易にしたと言える。

「銭荒」について言及すれば、これはもともと必然的に、貨幣需要が貨幣供給に相対することが出来るかどうかという比較概念である。宋代の商品経済の発展は、勿論顕著な流通時における貨幣量の需要を拡大したが、まだ別の方面から見ると、北宋の官営鑄銭業は未曾有の技術優勢(胆水煎銅法、石炭木炭の広泛な使用のような、後者は宮崎市定が「燃料革命」と

(2) 鄧庵銘「談談宋史研究的幾個問題」『社会科学戦線』1986年第2期。

(3) 漆侠『宋代経済史』上冊26-27頁、上海人民出版社。

(4) 国際歴史学会議日本国内委員会『戦後日本研究中国歴史動態』三秦出版社。

(5) 宮崎市定「東洋の文芸復興と西洋の文芸復興」。

(6) 宮崎市定「宋代的煤和鉄」。

称された)の助けを借りて、更にもっと速い発展を獲得している。宋代の金属貨幣の生産は、建国後50年に到らない時期に高産期に進入し、この後ずっと持続して宋代一代を通じて商品交換に大量の貨幣を提供した。宮崎の考証によれば、貨幣の供給は宋代を通じて官鑄の銅銭だけでも二億貫に達している。⁽⁷⁾我が国で有名な貨幣史専門家故彭信威教授の推定によれば、北宋で流通した私銭、鉄銭、交子、前朝旧銭(開元銭)、自鑄貨幣すべてを合算すると、「全部の貨幣流通量は二億五六千万貫のはずだ」と言っている。⁽⁸⁾宋代の貨幣増長が経済増長を超越しているということについては、私の知っているところによれば、ただ彭信威先生のみが正しい指摘を為しており、「宋朝の商業は確かに前代に比較して発達したが、宋朝の貨幣数量と銅銭数量もまた前代より増加した。しかし我々が、宋代の商業が前代に比較して増加した規模を推定することは難しいが、いずれにしてもこの種の商業の規模は、北宋の銅銭鑄造額が唐朝に比較して十倍ないしは三十倍に増加しているのをみても、やはり貨幣数量と銅銭数量の増加の規模には追い付かない」⁽⁹⁾と言っている。「商品経済発展」の論者が、もし彭先生がやられたように貨幣の鑄造を系統的に考察していれば、簡単にはこのような結論は得られなかったかも知れない。だから我々の前面にあって研究の必要のある「銭荒」は、商品経済発展、或いは貨幣供給量不足の条件下でのものであるということは不可能であって、ただ高鑄幣量の条件下で発生されたものであろうということだけが可能なのである。

(二)銭荒は「銅幣外泄」の説に根ざすものであり、殆どが宋代の人の観点を取っている。更には元代の大史学家馬端臨でさえもそうである。すなわち『文献通考・錢幣考』によれば、「自王安石為政，始罷銅禁，奸民日銷為器，辺関海舶不復嚙錢之出，国用日耗，……民間錢荒，故方平極言之」とある。曾て三司使を任じた張方平が確かに錢幣外泄を激しく批評して、

(7) 宮崎市定『五代宋初的通貨問題』。

(8) 彭信威『中国貨幣史』451頁，419頁，1988年版，上海人民出版社。

(9) 同上。

彼は「錢本中国之宝貨，今乃于四夷共用」⁽¹⁰⁾と言っている。劉摯もまた錢荒の原因は「外泄四夷」⁽¹¹⁾にあると考えた。このようにみてくると錢荒は貨幣外泄に帰結するという理解が、宋代の人の普遍の認識であると言える。

問題は、宋代に貨幣外泄が発生したかどうかではなく、客観的に言えば、何らの外泄をも発生しないことの方が、却って不思議な事情を呈する。紀元10～12世紀の華夏大陸は、ちょうど幾つかの政權が併存していた時代であり、その中で北宋が周辺の少数民族政權の経済、文化の発展水準より遙かに超出し、終始当時の中国が「中心」的位置にあったことは疑いなく、その結果周辺政權ないしは海外「諸蕃」の交往の主要な対象となって、貨幣の流出は不可避であった。しかしながらこれによって、北宋が「当時世界上で経済文化が最高度に発展した国家」（王曾瑜先生語）であるのに、「錢荒」が齎されたということは理に適っていない。それでは実際には、北宋は周辺政權との貿易で長期にわたって赤字の状態にあった、と言うのと同じである。しかもこれらの貿易は、またすべて貨幣で決算していたので、貨幣外泄が「錢荒」を齎したということは、明らかに歴史事実と背いている。しかも公開的で合法的な大量外泄に至っては、期間はそんなには長くない。張方平は「自熙寧七年頒行新勅，刪去旧条，削除錢禁，以此，辺関重車而出，海舶飽載而回……」⁽¹²⁾と言っている。馬端臨もまた「自王安石為政，始罷銅禁」⁽¹³⁾と言っており、時期はともにとてはっきりとした。更にまた銅禁の時期を重ねて述べると、遅くとも元豐二年としても遅くはない。すなわち『宋史・食貨志・互市舶法』によれば「元豐二年，賈人入高麗，盜及五千緡者明州籍其名，歲責保給引發船，無引者如盜販法。……先是，禁人私販，然不能絶……故明立是法」⁽¹⁴⁾とあることから明らかである。元祐年間の錢幣闕出の嚴禁については、更には詳しく述べる必要はない。推

(10) 『宋史・食貨下二・錢幣』。

(11) 『忠肅集』卷五，「乞復禁錢疏」。

(12) 『宋史・食貨下二・錢幣』。

(13) 『文獻通考・錢幣考』。

(14) 『宋史・食貨下八・互市舶法』。

測してみても、熙寧七年（1074）から元豐二年（1079）まで、長くともせいぜい持続したとしても6年を過ぎることはない。もしもこれをとって熙寧年間の銭荒を解釈すればまあまあではあるが、これを用いて宋初にはじまり仁宗の宝元、康定年間に激化された銭荒を解釈するとすれば、すなわちこの論説は通じにくい。

『宋市・食貨志』の中に具体的に貨幣外泄を反映した史料があり、主としては次の三則である。

- (1) 宋初、西北辺内属戎人、多齎貨帛于秦，階州易銅錢出塞，銷鑄為器。乃詔吏民闌出銅錢，百上論罪，至五貫以上送闕下（『錢幣』）。
- (2) 河北榷場博買契丹羊，歲数万路遠抵京師，皆瘦惡而死，公私費錢四十余万緡（『會計』）。
- (3) 供備庫使鄭卣使契丹還，還言「其給与籍者錢皆中国所鑄」。乃增嚴三路闌出法（『錢幣』）。

第一則は駁正の必要がない。第二則は非経常的な形式の貿易であり、例外的なものである。筆者は曾て『遼史』の「羸老之羊……」という史料を例と為して駁正を行い、宋、遼間の経常的な貿易は、主として「二下為便」という実物交換方式を取ったことを説明した。同じ意味で『遼史・耶律室魯伝』はもっとはっきりと述べていて「以本部俸羊多闕，部人空乏，請以羸老之羊及皮毛，歲易南中之絹，彼此利之」とある。史料に出ている「南中」の二文字は、翦伯贊、鄭天挺の二先輩の解釈によれば、北宋を指す。⁽¹⁵⁾

「歳易」の二文字は、則ち交換の恒常性であることを指摘して明らかにした。宋遼貿易の正常な形式は、この実物貿易であることが、はっきりと分かったのではないか？蘇轍が遼国に使したときに見聞した国内で、宋銭が使用されていた情況、時期もまた熙寧七年以後であった。これに相對して、遼の貨幣が北宋の境内に流入した史料も、我々は捜さなければならない。例えば、景德三年（1006）の「詔民以書籍赴沿辺榷場博易者，非九經書疏悉禁之，凡官器物如旧，而增繒帛，漆器，秬稷，所入者有銀，錢，布，羊，

(15) 翦伯贊，鄭天挺『中国通史參考資料』第五冊，中華書局。

馬、橐駝、歲獲四十余万⁽¹⁶⁾」のようなものである。我々はこの史料によって、遼の貨幣が宋に外泄した、と説明することが出来るのかどうか？おそらく、これが正常な貿易往来である、と見ることは出来ないのかも知れない。契丹で宋銭が発見された事に至っても、また数少ないことではないようである。其の一、鄭師が契丹に使した事に関しては、『宋史』には詳載されていないが、遼史専門家であった故傅樂煥先生の考証によれば、時期は哲宗紹聖元年（1094）であり、正使は秘書少監張舜民、「鄭師副之」であって、使命は大遼が宣仁太后を吊祭した礼を回謝することであったという⁽¹⁷⁾。熙寧七年（1074）になって、銭禁を開放してちょうど20年となった。其の二、遼国の国内で以前から宋銭の流通があり、その上に北宋が遼に対して已に八・九十年間も持続した所謂「歲賜」を加えたもの、これらが宋銭ではないことを誰が保証することが出来ようか？

（三）私銷によって北宋の銭荒が導かれるという問題に対して、私は多くの人が未だ兩種形式の私銷—私銷鑄器と私銷鑄幣の影響をはっきりと分けることができていないと認識している。張方平は「……自廢罷銅禁，民間銷毀無復可辦，銷熔十錢得精銅一兩，造作器用，獲利五倍。如此，則逐州置爐，每爐增數，是猶呖涇之益，而供尾閭之泄也⁽¹⁸⁾」と言っている。馬端臨は「自王安石為政，……奸民日銷錢為器⁽¹⁹⁾」とあり，民間で盛んに行われていた錢を銷して器と為した時期については，はっきりと説明されており，熙寧七年に銅禁を一たび開放するとすべて「無復可辦」となったと言っている。これ以前にあっても私銷がないとは言えないが，主要な形式は錢を銷して幣と為すことであった。道理は大変簡単であり，宋代の銅禁は非常に厳しく，「旧犯銅禁七斤以上處死」，「京城蓄銅器者限兩月悉送官⁽²⁰⁾」とある。この様な不利な環境の中で密かに私銷鑄器の機会があっても，坊場に

(16) 『宋史・食貨下八・互市舶法』。

(17) 傅樂煥『宋遼聘使表稿』『遼史叢考』219頁，中華書局。

(18) 『宋史・食貨下二・錢幣』。

(19) 『文獻通考・錢幣考』。

(20) 『宋史・食貨下二・錢幣』。

齎して交換する機会はない。しかも私鑄銭幣は、則ち全く別の一種の情況であり、各式各様の私銭がもともと坊市には溢れていたもので、手放して流通界に投入することは極めて容易なことであった。宋初には何度も全国的に偽劣私銭を精査する活動を展開し、大量の焼毀を実行したが、「然民間惡銭尚多」⁽²¹⁾の結果であった。惡銭の流通は、大量の私幣の市場での需要を提供した。宋廷は暫くの間はまだ大量の官幣は鑄造できず、そのために、通貨の欠乏を補うことが出来ないことに鑑みて、限度を定めて私銭流通の合法性を承認しないわけにはゆかなかった。すなわち「江北諸州所有銭、非甚惡薄者、新、旧、大、小兼用」⁽²²⁾とある。私鑄の主要な形式が私鑄であるからには、私鑄はまた雜物を混ぜ、偽物を施し、重さを減ずるなどの方式で、少量の官銭を非法に加工して数量のもっと多い私銭と成って流通領域に擠入し、その結果はせいぜい通貨の膨脹があっただけで、どうしてそのために銭荒が発生するのか？これに関しては、まだ多くの研究論文がはっきりと説明をしていない問題である。

二．銭荒と北宋財政

銭荒の探源は、北宋財政の研究を離れては存在しない。宋代は高度な集権的な財政体制であり、「外州府無留財，天下支用悉出三司」とある。一方民間では、事実上大量の私銭が流通しているが、法律で許可されている主要な交換の媒介は、建国初期を除いては官銭である。その鑄造権もまた政府が握っている。統一的な中央集権財政体制は、同時にまた独占的貨幣投入体制をも兼ねている。財政は事実上已に経成され、社会における貨幣流通を操縦制御する中枢と為っていた。その表現が次のようにある。一、社会における商品流通中の貨幣の存在量は、主として中央財政の貨幣賦税の徴収（回収）量によって決定される。このことに関して宋の人は、已に一定程度以上の意識をこの点にまで持っていた。呂陶の言によれば「現銭

(21) 『宋史・食貨下二・錢幣』。

(22) 同上。

大半入官、市井少有転用⁽²³⁾とある。『宋史・食貨志・錢幣』によれば、（大中祥符間）「諸路錢歲輸京師，四方由此錢重而貨輕」とある。これを財政の角度から見れば現錢徴収量の超過，貨幣流通の角度から見れば貨幣の回収量の超過と見做される。一宋の人はこれを「斂」と言ったが、ただこれは行政的回収にすぎなく、経済的回収ではない。しかしこの回収が、大巾に社会流通領域での貨幣の存在量を減少させることは疑わない。二、社会における商品流通の中での貨幣の増量は、主として中央財政からの貨幣投入の数量によって決定する。至道末以降、北宋の毎年の新鑄貨幣の数量は、大体がみな100万～300万緡にある。しかしながら、これらの貨幣は、直接投入されて民間で流通するものではなく、朝廷の「歳入」としてまず内蔵庫に納入させ、内蔵庫より一部分を分けて三司に与え、しかる後に再び財政支出として民間に投入しており、すなわち「諸錢監所鑄錢悉入于王府，歳出其奇羨給之三司，方流布于天下⁽²⁴⁾」とある。この外にも、朝廷の毎年の賦税徴収ルートを通じて、中央財政に集中した貨幣数量もまた相当なものであって、大体年間鑄幣量の十何倍ほどである。このような多くの貨幣が高度に集中することは、すなわち社会での流通の過程で必要とされる貨幣の供給が、主として中央財政からの投入に依存することとなり、一宋の人はこれを「散」と言った。もし財政が連続して徴収量が多くそれを投入すれば、一宋の人はこれを「斂多散少⁽²⁵⁾」と言った。貨幣の投入を制御するか、或いはこの投入（散）ルートの塞がりが発生すれば、民間では通貨の欠乏（錢荒）が発生する。宋初の貨幣の封椿は、錢荒を醸成しており、すなわちこれが例証となる。

しかしながら、財政収支と貨幣流通とは、またはっきりとした区別がある。即ち、金属貨幣の過去何年間かの蓄積の総額が、社会における商品貿易総額と相対してみても少なくない状況下にあつては、財政の節余（「散」

(23) 『浄徳集』巻一、「奏乞放免寬剩投錢狀」。

(24) 『宋史・食貨下二・錢幣』。

(25) 『宋史・食貨上四・常平義倉』。

が「斂」より少ない）が民間での銭少を齎す可能性はあるが、ただ財政赤字は却って民間の銭幣を増加させて、銭荒を緩解する助けになる。その為に財政赤字（「斂」より「散」が大きい）の意味するところは、往年の積貯を用いなければならないということとなる。二者の差額が大きすぎれば、貨幣の平価切下げを行うことさえ発生する。このことに関して諒解に苦しむのは、北宋の銭荒の最も厳しい時期が、あいにくと仁宗宝元以降に発生していることで、しかもこの時期が丁度二つの高峰—財政赤字の高峰と鑄幣の高峰とが重なりあった時期であり、ただ「供国之用及待經費」の左藏庫が已に底をついただけでなく、その場で「天子之私藏」の内藏庫からも続いて全部出した。すなわち張方平の説くところの「自康定，慶曆以来，⁽²⁶⁾ 発諸宿藏，以助興費，百年之積，謂存空簿」は嘘ではないわけである。

左、内藏庫がともに空であるからには、「百年之積」は已に投放して出て行ってしまっており、この様な中でどうして民間で銭荒が発生するのか？原因は何であるのか？銭荒の成因については宋の人もしろいろな角度から探求していて、前述の「外泄説」を除いては他にまた「土木費用」説があり、政和年間の淮南漕官張根の認識の如きは、その中にあって代表的なものである。彼は「天下之費莫大于土木之功，其次如人臣賜第。一条無慮数十万緡，稍增雄霸，非百万不可。佐命如趙普，定策如韓琦，不聞峻宇雕牆僭拟官省，奈何剥民膚髓為厮役之奉乎」⁽²⁷⁾と言っている。この宏論が、もしも「節財」を論じているのなら、妥当ではないことはないが、単に「銭荒」を論じているのなら、則ちそれはずばり急所にはあたっていない。貨幣流通の角度からみれば土木工作は銭財を浪費すると言っても、これは社会へ直接に貨幣を投入する一本の重要なルートであって、財政収入の大量消耗を齎す可能性はあるが、銭荒を招来することはない。銭荒の原因を宋代土木工作の面から考慮してみると、これには官匠营造の構成要素がかなりあり、やはり大量の貨幣（給料の支払いと建材等の購入の形式を

(26) 『楽全集』巻23，24。

(27) 『宋史・食貨下・會計』。

通じて）が直接に民間に流れているという事実があって、このことからの考察を避けることはできない。紙幅に限りがあるために、ここでは暫く例証を省略する。この方面に関しての認識は、大史学家司馬光のものが最も現実に接近しているので、かわりに示せば、「国用不足，在用度大奢，賞賜不節，宗室繁多，官職冗濫，軍旅不精⁽²⁸⁾」とある。派手に、しかも贅沢にやりすぎた祀典，節制しなかった賞賞，それに加えて益々増長していく皇室，官吏と兵員軍隊は，殆ど北宋全部の財政収入を消耗し尽した。財政はこの方面の貨幣を用いるが，その支出が民間へ流れ出ていくことができるかどうかは，上述の非生産者階層の，市場への依存の程度によって決まる。北宋代は，完全で殆どのものが包含されている程の実物供給制度であって，上述の非生産者階層は優裕生活をおくっていた。しかも手厚い貨幣給料と，いろいろな名目の賞賞，補助金が「悉聚而蓄」とあるように，転化して貯蔵貨幣となり，民間，坊市に流入するものはとても少なく，結局は民間で継続している「銭荒」を導くこととなるのである。漆俠先生は曾て「宋代の大量の金銀銅銭は官僚士大手の手に集中して，ただ優厚な給料だけが富を達成させることができる⁽²⁹⁾」と言っていることが，一番正しい評論と言える。もともと循環状態を呈すべき貨幣流通は，中間環節の阻断によって奇変して単向流通となって，その結果当然流通の継続しにくい状態を齎し，それがどうして「財不藏于国，又不在民⁽³⁰⁾」の局面を出現させないのか？

三．銭荒が発生した地区，時期の考訂及び北宋の物価

彭信威先生は，北宋貨幣の増長が経済の増長より先である，という前提から出発し，従って正確に銭荒は主として商品経済の発展によって発生した，という結論を否定して，この方面に力を持つ数少ない専門家の一人となった。しかしながら，彭先生はまた北宋物価上昇の成り行きから出発し

(28) 『宋史・食貨下・會計』。

(29) 漆俠『宋代的商業資本与高利貸資本』『宋史研究論文集』，河南人民出版社。

(30) 『宋史・食貨下・會計』。

て、銭荒が宋代に出現したのは一時的なものであると考えられた。彼は「宋期には何度かのいわゆる銭荒が発生したが、あれは特殊な時期の特殊現象であり、一時的なものである⁽³¹⁾」と言っている。私は、この結論は妥当ではないと思う。彭先生は造詣が極めて深く、かつ貨幣史専門家であるので具体的な理由は展開されていないが、私は彼が次の様な二つの前提から出発して推論したものとする。第一、宋代の貨幣増長の規模は経済発展より速く、貨幣の総供給量は経済発展の需要を満足させるに足りるものであった。第二、宋代の物価は上昇の趨勢を呈し、これに関しては『中国貨幣史』の中で専章で分析されたもので、通常の貨幣理論分析に従えば、物価の上昇は一般的に貨幣の過剰供給が齎すと説明されており、これは一種の通貨膨脹の現象であって通貨欠乏ではない。上述の二つの条件を出発点として推論すれば、論理に適っている。しかしながら私は、彭先生は貨幣流通の具体的な過程が、北宋物価に対して齎した影響を軽視して、鉄銭行使区域と銅銭行使区域の二種同じではない形式の物価の上昇を区分していないと思う。これは恰も宋代の特殊な経済現象一少数地区での通貨氾濫と広大地区での通貨欠乏とが同時に併存し、物価の上昇と銭荒とが同時に併存している現象であると言える。銭荒が宋代に発生したのは決して「一時的」な現象ではなく、北宋王朝の大部分の時代を通してである。しかも銭荒が発生した地区もまた、遥かに遠い個別的なところではない。次に、我々は歴史年代の筋道に従って追跡調査の方式で考訂を行う。

(1)太平興国四年(979)、四川「銅錢已竭、民甚苦之」(『錢幣』)。

(2)太平興国八年(983)、是時、以福建錢少、令建州鑄大鉄錢」(『錢幣』)。

(3)大中祥符三年(1010)、河北轉運使李士衡言、「本路……民間罕有緡錢」(『布帛』)。

(4)宝元中(1039)、天章閣侍讀賈昌朝言、「財不藏于国、又不在民」(『會計』)。

(5)慶曆三年(1043)、歐陽修言、「淮甸近歲号为銭荒」(『欧陽文忠公集』)

(31) 彭信威『中国貨幣史』451、419頁、1988年版、上海人民出版社。

卷99)。

(6)熙寧二年(1069),今京師之錢……而庫存無錢。又,司馬光言,「臣聞江淮之南,民間乏錢,謂之錢荒」(『和羅』)。

(7)熙寧八年(1075),張方平言,「比年公私上下并若乏錢,百貨不通,人情窘迫,謂之錢荒」(『錢幣』)。

(8)元符二年(1099),時內藏空乏(『和羅』)。又,鳳州通判馬景夷言,「當公私匱乏之時,諸路州縣官私銅錢積貯万數」(『錢幣』)。

上述の統計調査を通じて、我々は全般的に北宋の錢荒が全面的に覆った地区、そして錢欠乏の程度と持続した時間とを見通すことは依然としてできないが、少なくとも我々を助けて以下の判断をやってくれる。すなわち錢荒が発生し、或いはずっと錢荒状態にあった地区は、四川、福建、河北、江淮、江南以南、京師に波及した。錢荒延続の時期は宋初(960)からずっと持続して崇寧前に到り、大体一世紀半程であった。その間にあって二度、すなわち仁宗の宝元、康定年間と神宗の元豐以後には、甚だ「公私俱匱」の状態に発展して大錢の鑄造に頼らないわけにはゆかなくなり、これによって財政支出と貨幣供給とを支えた。その上に認めなければならないのは、その間にもまた一時「寛松」の時期があって、『宋史・安燾伝』によれば「熙寧、元豐間、中外府庫、無不充衍、小邑所積錢米、亦不減二十万」とあるが、期間は極めて短い。「元豐以後、西師大舉、⁽³²⁾刃用匱乏」⁽³³⁾とある。元符末になって已に発展して「熙豐余積、用之幾尽」の程度に到った。たとえ「熙豐余積」を已に投入した期間内であっても、民間の錢荒の患はやはり未だ緩解できなく、この点については、我々は上記の統計資料の中で已に見た。

その次に、我々は錢荒と北宋の物価変動との関係を研究する。北宋の物価と北宋の幣制及び流通体制の間には密切な関連があり、前者の変動は後者の変動の影響を非常に多く受けた。北宋の幣制と流通体制は、諸々の要

(32) 『宋史・食貨下二・錢幣』。

(33) 同上。

因によって影響を受けやすい状態となり、ひっきりなしの演変が一種の奇形状態を呈した。以下に表現してみることとする。第一、貨幣値と貨幣価との平衡。とりわけ銅鑄貨幣の長期の停留が、幣値が幣価より高いという局面にした。多くの手工製造工程を経てのちに加工製作によって銅幣と成しても、ひとたび銷毀すれば却って五倍以上の厚利を得、これがとりもなおさずこの種の失衡を反映しているのである。もしも厳しい銅禁の措置がなされなければ、銅幣体系自身が継続して維持しにくくなる。金属貨幣は貨幣としては真価の実物商品として作られ、それ自身の生産と流通はともに価値法則の支配を脱却できず、北宋幣制それ自身の内に一種「自我摧消」の基因を含んでいる。第二、地区の割拠、区間の封鎖。自然の要因（例えば周辺政権に対する防御）など、北宋は統一された国土であったにもかかわらず、同じようには区分されずして互いに分割された貨幣流通で、貨幣流通体系の断裂を齎した。宮崎先生は『五代宋初の通貨問題』の文中で「五代の分裂は貨幣の分裂を齎した。……しかし宋代の統一は同時にまた貨幣の統一でもある」と言っている。筆者は、それが正しいとは思わない。宋代は国土は統一されたが、貨幣は統一されていない。或いは北宋は形式上では貨幣を統一したが、実際にはやはり貨幣流通体系の断裂を維持しており、人為によって国内の統一市場を分割していたのかも知れない。この種の分裂については次の叙述の中で見られるが、ともかくもこれが物価変動に対して極めて重要な影響を持っている。第三、当量（幣価）変動の頻繁さ、銅、鉄の比価相場の動揺、これもまた北宋の物価変動に影響を及ぼした重要な要因である。

古代の物価変動の趨勢の考察は、複雑な問題である。物価の変動は、多方面の非経済要因によって影響を受ける。物価の上昇は一年の作柄、豊年か凶年かによるのかも知れなく「年儉物貴、難于供億⁽³⁴⁾」とある。季節性の欠乏によるのかも知れなく「人之困乏、常在新陳不接之時⁽³⁵⁾」とある。また

(34) 『宋朝諸臣奏議』巻109。

平準の時に及ばないので、市場独占価格の形成によるのかも知れなく「古通有無，權貴賤以平物価⁽³⁶⁾」とある。物価を平準にし抑制する作業が弱いことにより「富商大室得以乘時射利⁽³⁷⁾」とあって、物価の上昇を招来する。例えば魏繼宗は曾て熙寧五年の東京の物価変動状況を述べて「京師百貨所居，市無常価，貴賤相傾，或倍本数。富人大姓皆得乘伺緩急，擅開闔斂散之權。当其商旅并至而物来于非時，則時抑其価使極賤，而後争出私蓄以収之，及舟車不繼而京師物少，民有所取，則往往閉塞蓄積，待其価昂貴而後售，至取数倍之息⁽³⁸⁾」とある。すなわち市覇が相場を独占し，物価を操縦しているのである。時には同一の歴史時期にあっても，違う地区の間では流通の不発達によって物価は何倍か，甚しいのでは十数倍の差がある。このことによって，我々は一，二則ち某地或いは某処の年代の物価の資料の中から，北宋の物価変動の全貌を窺探することは大変に難しい。しかしながら，北宋の物価変動の総体的な趨勢は，上昇傾向にあったということは肯定できる。范仲淹は「皇朝之初，承五代乱離之後，民庶凋敝，時物至賤，……咸平以後，民庶漸繁，時物遂貴⁽³⁹⁾」と言っている。これは社会発展の一般的な法則に符合し，通貨膨脹と見ることはできない。北宋時代，本当に通貨膨脹が発生した主な処は，鉄錢行使区域である。これについては，次の三つの史料の中から反映できる。

(1)四川，（太平興国五年）自平蜀，沈倫等悉取銅錢上供，及増鑄鉄錢易民銅錢，益買金銀裝発，頗失裁抑，物価滋長，鉄錢弥賤（『錢幣』）。

(2)陝西，（慶曆間）因敕江南鑄大銅錢，而江，池，饒，建，饒号又鑄小鉄鑄，悉輦運至関中数州，錢雜行……民間盜鑄者衆，錢文大乱，物価翔踊（『錢幣』）。

(3)四川，（崇觀間）銅錢比旧輕十倍，又流入川界，錢輕物重頗類陝西…

(35) 『宋会要輯稿・食貨』四。

(36) 『宋会要輯稿』三七。

(37) 同上。

(38) 『統資治通鑑長編』卷231。

(39) 『范文正公集・政府奏議』上。

…盗鑄濫銭益多，百物増価（『銭幣』）。

上述の地区の通貨膨脹の原因は、主として二つある。其の一、節制の無い地域では鉄銭を鼓鑄し、しかも厳格に界を分けて流通させた。即ち鉄銭行使区域の間でもまた画地して堅固となし、相互の流通を禁止した。例えば崇寧年間に「以（四川）鉄銭猥多，禁陝西鉄銭入蜀⁽⁴⁰⁾」とある如くである。厳格に区間の流通が制限されてから大量の貨幣が欠乏して、一種の蓄緩の機能を欠き、「以鼓鑄無窮之銭而供有限流転之用」の局面を形成することになって、必然的に大量の貨幣を「積滯一隅」⁽⁴¹⁾、「暴如丘山⁽⁴¹⁾」とならしめた。熙寧の初、わずかに同、華二州で滞貨の小鉄銭が40余万緡に達し、ただ古鉄を積み上げただけでなく、最後にはやむを得ず河東路と鉄をもって交換してこれを終えた⁽⁴²⁾。其の二、人為的な貨幣評価の虚高は一大銭を鑄すること、民間での頻繁なる私鑄を誘発し、流通領域においても偽劣な私銭が増加した。それならば中原及び南方の広大な銅銭行使区域で銭荒が発生した時期には、物価の上昇があったのか無かったのか？もしあったとすれば「錢重貨輕」をいかに解釈するのがいいのか？

物価上昇の趨勢は広大な銅銭行使区域にあって存在するものであり、鉄銭行使区域においては通貨膨脹のようなことは未だ発生したことがないと私は思う。貨幣総量の増加の方式は違う。即ち銅材料の欠乏による上述地区の貨幣総量の増加は、無制限に銅銭を鼓鑄することをよりどころとすることではなく、大巾に銅銭の虚価を一銅大銭を継続的に鑄することによって、高めていった。この種の「虚高物估」の対応措置で、まずはじめに市場の反応を起こしたのが「百物増価」である。大銭を所有している者は、政府が規定した当量（幣価）どおりに坊場で継続して交換する時に、或いは拒収にあった時、或いは強制打当にあった時に対応した。初めは「以一当十」で行い、のちには「当五」で、再び「当三」で割り、最後には「一

(40) 『宋史・食貨下二・銭幣』。

(41) 同上。

(42) 同上。

当二」に下がり「其用日輕」⁽⁴³⁾」となった。「自行当二錢，銅費相当，盜鑄衰息。……自是折二錢遂行于天下」⁽⁴⁴⁾とある。朝廷は財政危機と通貨危機とを緩解するために手段を選ばず，しかも大錢を鑄する措置を取り「見えない手」のように広大な小商品生産者，手工業者と中小商人の労働財産を強欲に略奪した。物価をあおりたて，同時に急激に彼らたちの蓄積を大巾に値下げさせておいて，「百貨不通，万商束手」⁽⁴⁵⁾という局面がどうして出現しないと言うのか？これと相反して，それらの実物供給制の温床の上に横たわり，基本的には独立して交換市場の外にある非生産者群体に対して，その利益を受けた程度は言わずもがなの自明のものであり，物価の上昇と錢荒とが矛盾がないというだけでなく，かえって相同じ時期，空間の内にあって同時に進行していても互いに矛盾衝突しないように結ばれて一緒にあること，これはむしろ北宋貨幣流通体制より派生したまた一つの奇変現象であるといった方がよい。彭先生の巨著—『中国貨幣史』の主旨は，中国貨幣の通史を考察することであって，当然各年代ごとの貨幣流通については詳しい考察をする暇がなく，錢荒を「一時的」現象と捉えたのは，もしかしたら一種の疏忽かも知れない。

訳者あとがき

本論文は，袁一堂氏が「社会科学戦線」(1993年，第2期～3期)に発表したものである。訳者は先に同氏の論文「北宋の錢荒：幣制から流通体制に至るまでの考察」の翻訳を發表しているので参照して戴きたい(「広島経済大学経済研究論集」17-4，1995年3月)。尚，この論文の素訳は前回と同様に沙鄭軍氏(本学大学院前期課程修了，蘇州大学歴史系助理研究員)が試み，訳者が推敲し論考を構成した。この場を借りて御協力戴いた沙氏に感謝申し上げたい。

(43) 『宋史・食貨下二・錢幣』。

(44) 同上。

(45) 『東全集』卷二六，「論錢禁銅法事」。